

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 3 年次生 M.A

1. はじめに

私は国際交流基金の助成を受け、2025年3月3日から3月29日まで行われたタイにあるシーナカリンウィロート大学への交換留学に行きました。この留学での経験を報告いたします。

2. 交換留学での目標

渡航前の目標として「タイの文化にふれ、異国の地の薬学教育を通して語学力を高めたい」と考えていました。現地では、約1ヶ月間という長期間滞在することができたこともあり、かなりローカルなところまでタイの文化にふれることができました。語学力の点では、タイの生徒や先生と話す機会が多く、日常会話のある程度話せるようになりました。一般的な留学ではなかなか使うことのない薬学英語を活用する場面も多くあり、分からない単語もありましたが、調べてすぐ実践に移せたので、語彙を増やすことができたと思います。また、英語だけでなくタイ語も少し話せるようになりました。タイの生徒たちにタイ語を教えてもらうことがよくあり、あいさつや数字、頻繁に用いるフレーズなどいろいろな表現を覚えることができました。

3. 大学生活

シーナカリンウィロート大学、通称SWUの薬学部はタイ中部のナコンナヨックにあります。大学のキャンパス内はとて広く、日中は無料で乗れるシャトルバスのようなものが走っています。そのキャンパス内に薬学部棟があり、私たちは毎日大学内の寮から薬学部棟に通っていました。授業については主に2~5回生の授業に参加していました。タイの生徒たちは英語が上手で積極的に話しかけてくれて、時間があるときは英語を通じて日本語とタイ語を教えあったりしてとても楽しかったです。

授業内容は主に曜日別で異なっていました。



月曜日は5年生の研究活動を見学しました。分析を主に行う研究室でサンドイッチ法などの分析法で成分の含有量を調べていました。吸光度を測る機器などさまざまな実験機器は日本と同じものを使っていましたが、例えばシリンダーのことをサイリンドーというなど、機器の名前の発音が若干違っており、それらを聞き取るのに苦戦しました。



火曜日は3年生の授業に参加させてもらいました。内容は毎回6個のテーマがありそのテーマに関する問題をグループで議論しながら解いていくというものです。そのテーマは漢方薬やタイの伝統的な薬に関することでした。タイの伝統的な薬は植物由来のものが多く、錠剤や液剤、匂いを嗅ぐことでリラックス効果が得られる嗅ぎ薬などがありました。嗅ぎ薬は実際に生徒の中にも使っている人が多くおり、ペパーミントの香りでもとてもスッキリするものが多かったです。

水曜日と木曜日は2年生の実験で、試液を使った確認試験に参加させてもらいました。計3回参加し、強心配糖体、サポニン、フラボノイドの確認試験を行いました。



フラボノイドの確認試験では実際に各々が採取した植物を用いて自分で成分の抽出を行いました。植物を使った授業内容が多いことが日本と異なる点だと印象深いです。金曜日は3年生の授業で、製剤の実験に参加しました。錠剤を造粒して錠剤の精度を確かめる試験を行いました。造粒方法は湿式造粒で、

日本で行う手順と同じだったのですが、写真の打錠機を使うだけでなく、組み立ても行いました。私が日本でやったときは打錠機の組み立てはしなかったのですが、タイでは1人で打錠機の組み立てをして錠剤を造粒するまでのテストがあるそうです。



4. 学外施設訪問

学校外の施設訪問では大学病院、大学が提携する植物園、地区保健推進病院、国立科学美術館に行きました。

大学病院には多くの分野があり、小児科、放射線科、精神科、眼科、耳鼻咽喉科、産婦人科、母乳外来、心臓科などがありました。日本と異なる部分は薬の受け渡しをする場所が病院内にあることです。病院内には写真のような調剤室があり、処方箋を受け取る、会計をする、薬を受け渡すというように3つの窓口がありました。薬剤師は最後の薬

を受け渡す窓口におり、そこで服薬指導をおこなっていました。

大学が提携する植物園は学校から少し離れたところにあり、多くの植物を見せていただきました。



植物園の方々がとても気さくで、薬草の説明や植物を使った遊びなど様々なことを教えてもらいました。ハーブなどはその場で食べさせてもらい、良い香りがするもの、反対に匂いがきつくて吐き出してしまったものもありました。また、バナナの成長前の状態も初めて見ました。バナナのつぼみの中にある雄蕊のようなものが全てバナナになると教えてもらって、私たちが普段見ているバナナはこのようにできていくのだと感心しました。

地区保健推進病院へは合計4回訪問させていただきました。学校近くの小さい病院に伺わせてもらい、患者さんが処方された薬をピッキングするのを手伝いました。ここでは日本とタイとの違いを多く見つけることができました。地区保健推進病院には生活習慣病の患者さんが多いです。そういう場合、日本では一回の処方多くて3週間分、そのあとはリフィル処方箋を活用しているのですが、タイでは一度に95日分の薬を処方していることが多くありました。これはタイでは病院の中で薬を処方し、日本のように



どこにでも薬局があるということがないからなのかと思いました。また、薬の商品名がほとんどのものが成分名と同じものだったことにも驚きました。日本から来た私たちでも商品名が成分名なのでパッケージを見たら何の薬なのかある程度分かったの

で、タイ人以外の薬剤師でも働きやすいと思いました。また、診療が終わると病院の方々がお昼ご飯を振舞ってくれました。毎回タイの伝統料理を用意してくださって、病院実習を一緒に行っていた生徒たちと食べて楽しかったです。

国立科学美術館には最上階にタイの歴史的な文化に関する展示がありました。大学の先生に展示物の解説をしてもらいながら見る事ができたのでとても理解が深まりました。シルクを実際に作っていた機械やタイの伝統的な楽器を見ることができてとても面白かったです。



5. 観光

私たちは週末にいろいろなところに観光に行きました。最終週はシーナカリンウィロート大学のアユタヤ出身の生徒がアユタヤ観光の案内をしてくれて、おすすめの飲食店や観光名所に連れて行ってくれました。また、最終日に飛行機の時間までショッピングをしようとバンコクに行くとそこで地震が発生しました。タイの人々は地震を経験したことがない人がほとんどで現場はパニック状態でした。幸い、私たちの周りでは地震による被害がなかったので無事でした。地震発生が昼過ぎで、飛行機の時間が深夜だったので、地震発生後は一旦大きな広場に避難し本震に備えました。1時間ほど広場で待機してもう大丈夫だろうと思い、空港へ移動しようと思ったのですが、電車が止まってしまい空港までの移動手段がなくなっていました。最初は電車の復旧を待っていたのですが、一向に動き出そうとせず、タクシーで移動することにしました。手当たり次第空港まで連れて行ってくれないかといろいろな人に声をかけ、やっとの思いでトゥクトゥクをつかまえることができました。旅行に行って怪我なく、無事に日本に帰ってくる事ができるのは当たり前のことではないのだと思い知らされました。

6. これからの自分

この交換留学を通して、タイ語を少し身につけることができました。タイの人々は英語だけでなく、日本語や中国語などさまざまな国の言語を独自で勉強していたので、私もさまざまな他言語を勉強して話せるようになりたいと思いました。今回の留学でタイ語を少し勉強できたので、もっとタイ語を勉強して今回仲良くなったシーナカリ

ンウィロート大学の生徒たちに会いに行ったり、タイで開催されているボランティア事業などに参加したりしてみたいと思いました。

7. 終わりに

今回、国際交流基金助成事業の助成を得て、この交換留学に参加させていただき、大変貴重な体験を得ました。手厚い支援をしていただいた両大学の先生方、事務職員の方々、シーナカリンウィロート大学の生徒たち、そして両親に感謝いたします。この留学で経験したことを糧によりグローバルな社会で活躍できるよう努力しようと思います。本当にありがとうございました。